

私のシベリア抑留生活

鳥取県 加藤 一郎

私は奉天、現在の瀋陽で抑留され、シベリアに送られ、約四年間の抑留生活を送ったのですが、何せ六十年も昔のことになり、記憶も薄くなり、特に同じ収容所で抑留生活を共にした方も、私の承知している範囲では十人いましたが、昨年東伯町の小豆沢 敏さん、御来屋の吉田信之さんが亡くなり、私一人になってしまいましたので、当時の状況を確認してお話しすることもできなくなり、誠に残念でもあり、淋しく思っております。

私は奉天で終戦を迎えたのですが、当時の第三方面軍司令部直属の部隊におりましたので、終戦後もしばらく市内の治安活動をしたり、いろいろな事がありました——お話しすれば誠に奇妙な体験をしました——北陵の収容所に入ったのは九月下旬で、正確なことは記憶しておりませんが、舞鶴

で申告した書類によりますと、九月二十七日に奉天を出発しておりますので、約一週間ほど前に入ったものと考えられます。

先ほどの舞鶴での身上申告書によりますと、九月二十七日に第五十四作業大隊として稲葉大尉を長として出発しております。そして昭和二十四（一九四九）年九月二十八日に復員しておりますので、奉天を出発して四年と一日で我が家に帰ることができたのであります。その前に昭和二十年三月三十日に広島県宇品港を出発して旧満州で約三年五カ月の軍隊生活がありますので、約八年近く軍隊及び抑留生活をしたことになるわけです。

列車が奉天から当時の新京（長春）・ハルピンを経由して黒河に到着したのは十月の終わり、黒河で少し荷役作業をいたしました。これは高粱とか満州で生産された食料をロシアの船に積み込む作業でした。そして川幅が千メートルに近い大きな河にロシアの軍の鉄船を連ねて橋を作っており、これを徒歩で渡り黒河の対岸のブラゴエシチ

エンスクに入りましたが、ここでもしばらく満州産の食料を貨車に積む作業をし、貨物列車に詰め込まれシベリアの中央にありますバイカル湖の手前のノヴィリンスクという駅に到着し、ここで収容所に入れられ本格的な抑留生活が始まったわけですが、これが十一月八日でありまして、奉天から出発して約一カ月半をかけてやっと目的地に着いたので、この間の私たちの体力の疲弊は大変なもので、これに関しては後ほど詳しくお話いたします。

シベリアの生活で最も困ったのは寒さ、食糧の問題、環境の劣悪さです。シベリアの十一月と言えば冬の最中で、特にこのノヴィリンスクはバイカル湖に近く世界で最も深いと言われ、日本の琵琶湖の約四十九倍もある大きな湖で、北半球の気候に大きな影響をもつ、冬は特に寒い地方でありました。

ノヴィリンスクでは作業中に気温が零下五〇度を下がったと言って、収容所の歩哨が作業をやめ

て帰るよう迎えに来たこともありました。

またアラコルハ収容所では冬の間は毎日零下五〇度以下に気温が下がり、気温が零下三〇度ぐらいまで上がるのを待って作業に出ていましたから、作業は大体半日でした。このように日本では想像もつかないような寒さの中で作業をしたのでありますが、その被服は満州から持ってきたものばかりですから、年月が経つほどに破損し、特に防寒被服なども中国服の綿入れのようなもので代用する始末、また部屋の暖房もシベリアに流された犯罪者の収容施設で、ペチカもお粗末なものですから、着の身着のままです寝ていました。冬は防寒服を着たままです寝ていました。

食料は満州から持ってきたものばかりで、トウモロコシを粉末にしたもの・高粱・大豆等、日本においては雑穀と称するものが主食であり、高粱などは最高級の食料ですが、小豆を塩で味付けしたのもおいしいものでした。しかし大豆は三食大豆のみの給食が一週間続いたことがありました

が、全員が下痢をして作業に支障があったので、一週間で終わったことがありました。

シベリアに抑留されて一年ほどは特に食料が悪く、寒さと栄養不足、過酷な労働で病人が多く出ましたが、私たちの作業隊ではウランウデの病院に送られました。

食料が不十分であった時の人間行動についておよそお話いたしますと

一 黒パンが一日三〇〇グラム配給されるのですが、日本のアンパンのように一つ一つあれば良いのですが、ロシアでは私達は枕パンと言っていた、日本の食パンの連なった枕のような形のパン、あるいは座布団パンと言っていた直径三十センチほどの座布団のような形のパンがあり、これを当番の者が切って分けるのですが、一番好まれるのは外側の硬い部分の多いものであり、中央の軟らかい部分は好まれませんでした。また日曜日などはこのパンを小さく切ってサイコロのような大きさ

にしたものを爪楊枝のようなもので刺して満腹感を味わっている人もいました。

二 食事は飯盒で分けていましたが、満州国軍のものは日本のものより小さいので、分配するときしばしば問題になり、最後には秤（天秤）を考案して平等に皆の者が納得するようなことが考えられました。

三 さらに変わったのは夕食のときのことですが、皆が食事を終えて床についたころを見計らって帰ってきて一人で食事をして満足する者がいましたが、何一つ物音のしない時に食事をするとペチャクチャ、第三者が聞くと非常に大きな音に聞こえ、いっぺんに腹が減ったような感じになり、目が覚めてしばらく眠れないこともありました。

また、ロシアの文書には肉が供せられるよう指示されていたようですが、四年間肉らしい物は食べることがなく、すべて臓物であったり、樺太から持ってきたと思われるみがきにしん、にしんの

樽漬けであり、スープの材料でした。

シベリアでは農作物の育成は不適で、ウクライナ・その他ヨーロッパ、ロシアから貨車で輸送していたので、キャベツなどは良いのですが、ジャガイモは凍って澱粉化していたものが多く、それだけ抑留の給食は質が下がることになりました。

質・量ともに少なく、満腹感を味わいたいと思恵を出しました。お湯を入れて飯盒一杯にする、また炊事からスープの残りをもらってきて一杯にする、などいろいろやっていました。塩分の摂りすぎか胃腸障害を起こす人もいて、それが原因で栄養失調になり命取りになる人も沢山いました。

特に昭和二十年から翌二十一年の春にかけて多くの死者が出ていますが、これは先に述べた輸送中の給食と、その環境が大きく関係しています。

私達が作業隊の輸送列車はいわゆる客車で座席であり、便所・洗面所が付いていました。洗面所は水が出なくて用をなしませんでしたが、これは輸送中の生活にはいささかも支障はありませんで

した。便所だけは非常にありがたいものでした。というのは、多くの者が輸送途中下痢をしてしばしば便所を利用したからです。

満州内は客車での旅でしたから種々不満はありましたが、昼夜の区別なく走行中でも排便することができてよかったです。ロシアに入ってから貨車で排便の設備がなく、列車が止まったらいち早く降りて用を足しました。困ったのは走行中に貨車の扉を開け取っ手につかまってお尻を出して排便するのですが、下痢便ですので、風圧で貨車の中に逆流し、入口付近の者は大変でした。

輸送中に既にこのように胃腸をこわし、栄養失調になっていた者がシベリアに入り、酷寒の中で栄養も十分でなく重労働に従事したのですから、当然のことながら体調はさらに悪くなっていきましたが、ロシアの軍隊は目に見えない疾病では作業を休ませてくれません。

私の所属していたウランウデ第三〇收容所関係の死亡状況を調べてみますと

昭和二十年十月～十二月の三カ月間に百十人

昭和二十一年一月～五月の五カ月間に百十三人

合計八カ月に六百二十三人

第三〇收容所管内の総死亡者九百四十人の内、

この八カ月に六百二十三人、全体の約六六パーセントが死亡しており、ソ連の調査においても他の收容所の例ではありませんが、死亡原因の五一・六パーセントは栄養失調症と報告されておりいかに栄養状態が悪かったか想像できます。

またソ連の報告の中で日本人の捕虜收容所における死亡率はドイツ人の捕虜收容所における死亡率の二倍である（〇・四～〇・一五）と報告されています。

輸送中の食糧事情、環境の悪さに加えて、厳しい気候条件、満足な住居施設がなかったこと、あらゆる種類の物資が不十分であったことがその原因と考えられます。

私の青春時代

秋田県 藤盛 定芳

私は、藤盛家の三男として生まれましたが、長男及び二男が幼少にして死亡してしまいましたので、生家の後継者として水田三反五畝歩、畑二反歩、山林二反歩の農家の経営を受け継がなければならなかったのです。しかしこのような零細農家では生計がなり立たず、花岡小学校を卒業すると郡立扇田準備場で一年間勉強をして、昭和十六（一九四一）年三月卒業して、同年五月には軍属を志願し、満州の関東軍情報部特務機関に勤務することとなりました。

これには父母はあまり賛成ではなかったようでしたが、この当時は大満州国建設の旗印の下に、若い青少年即ち青少年義勇軍を募集して渡満させたり、あるいは開拓団に若い花嫁さん等を送っていた時でしたので、家族にも何とか容認してもら